

特集「伸びる企業」「縮む企業」対談 菅伸子首相夫人×姜尚中

AFRA

'10.6.21

No.27 定価380円

アエラ

昭和63年6月10日発行
毎週月曜日発行
(6月14日発行) 通巻12231号



映画監督 北野 武



アーティスト集団

Chim↑Pom

紅一点・エリイから時計回りに、林、船岡、岡田、卯城。最前列の砂像が水野

△現代アート△をぶつ飛ばせ

デビュー作〈スープ☆ラット〉で物議を醸し、08年の〈ヒロシマの空をピカツとさせる〉で非難を浴びた、5人の野郎+紅一点・エリイのお騒がせアート集団である。

一見ふざけた今時の若者だが、誰よりも貪欲に「社会に認められたい」という野心を持つている。

文=早見和真 写真=門間新弥

オープンまで3日を切った、香港でのグループ展。他のブースのアーティストたちが肃々と準備を進める中、一見すれば今風のイケメン、半面、一昔前の過激派のようでもある5人の男たちは楽しそうに笑っていた。

「いやあ、まだ全体の3割もできないんじゃな

いっすかね。今回はさすがにやばそうつす」

メンバーの一人が全く「やばそう」な気配を見せずに言う。ある者は念入りに照明を調整し、あら者は糊の吹き付け方で逡巡する。次第に姿を現した会場で男女がカーセックスに勤しんでいる、そのすべてが風化しているというものだった。

オープニングをいよいよ翌日に控え、さすがに5人の口数も少なくなった。言葉はおろか、視線が交わされることもほとんどない。すっかり声をかけにくくなつたヒリヒリとした緊張感は、しかし一人の女性の登場によって杲氣なく打ち破られる。金髪に濃いアイライン、極短のホットパンツにシルバーのロングブーツという出で立ちの紅一点・エリイが会場に姿を見せた瞬間、男たちの顔に安堵とも取れる笑みが広がつた。

全員揃つたところで写真撮影を願い出ると、エリイは当然のように扇の要に立つた。「みんなちゃんと揃つた?」「ウッシャー、もうちょっとこつ

ち寄りなよ」「稻岡くんはフードかぶつて」……。手鏡で入念に前髪をいじりつつ、傲慢にも聞こえる指示を男たちは涼しい顔で受け入れる。

撮影を終えると男性メンバーはお伺いを立てるようエリイに製作の経過を説明した。そして彼女の発する思いつきとも取れる天真爛漫な声に聞き耳を立て、作品に反映させていく。その構図はまるで女神と5人のしもべのようでもある。

「アート村の奇跡」エリイを擁して業界に殴り込み

卵城の父と母は学生運動の同志だった。親としては「わりと柔軟」だったが、幼い頃の卵城はいい子であることを自らに強要する。そんな自分と

決別したいと入学した高校で、のちにチームのサブリーダーとなる林靖高と出会つた。風貌から卵城は林が誰よりも「イケてる」と感じ、高校生活を賭して声をかける。林は「今でこそイケメン扱いされますが、卵城くんはとにかくダサかった。親友になれる気はしなかつた」と笑うが、自身もまた中学時代は極端に背の低いことに劣等感を抱いていた。周囲の気を引くために必死にふざける卵城にかつての自分がすぐにダブり、それは〈Chim↑Pom〉としての今の活動にまで通じるものだと振り返る。

だが、メンバーの大半は今も〈Chim↑Pom〉だけでは生活が成り立たない。結成以来、各人の収入が3万円を超えた月はほとんどなく、10万円となると皆無。3人は実家で暮らし、彼女に養われている者がいれば、債務整理のため弁護士の世話になつている者もいる。そうした状況を、リーダーの卯城竜太はカラツとした口調で説明する。

「一番の理由は僕らの作品が売りものになりにくいということ。もちろん売れるために仕事するつもりはないんですけど、この年になつて家族との同居とか借金は正直きついですよね」。



香港で行われた個展の一コマ。エリイ不在のある日の撮影では、岡田がエリイのイラストが描かれたTシャツを着ていた



ト界の奇才、会田誠の『Lonely Planet』である。「とにかくパンクだつた。ゴッホから現在に至るアートの更新をすべて見せられた気がした」。

アート的な体験は続いた。卯城が旅先のニューヨークで立ち寄ったギャラリーに、老人が孫の手を引き入ってきた。少年がある絵の前で「これが欲しい」と伝えると、老人は当然のような顔でスタッフと値段交渉を始めたのだ。芸術が生活に溶け込む光景は、「アート=限られた人間のもの」という先入観を簡単に一蹴した。

帰国した卯城は意を決して会田のギャラリーを訪ねた。そこには高校生の頃に会田の作品に触れ、

当初、「人の興味はパンクロックに向いたが『既成概念を打ち壊す』パンク像と、音楽という既存の表現との間に窮屈さを覚え、次第に楽器を持たなくなる。行きついたのは他人の会話を盗聴したり、老婆の自己批判をテープに吹き込んだりする作品づくり」だ。そんな二人を次のステージに

「こんなところに現代の太宰がいた！」という感想を抱いていたエリイがいた。第一印象は最悪だった。食事の席でいきなり「誰の紹介？」と聞いてきたエリイに、卯城はたまらずカチンとくる。

(何なんだよ、このギャル)

慕い、卯城は三期生として入学、初めて同年代の仲間を得る。しばらくは新しい分野の友人といふだけで楽しかったが、ニューヨークで見た光景からはかけ離れていた。ほとんどの人の目がアートという“業界”の内側ばかりを向いていた。

その中にあってエリイの存在は稀有だった。六本木、クラブ、ギャル……。彼女が「好き」と公言するほほすべてのものが周囲と乖離していた。ストイックこそ美德とする文化にあって、自分の欲求に忠実なエリイの存在は奇跡にも思えた。あるいは彼女をアイコンに立てれば、社会にも介入

（彼女に思案を二つ）の右側に立脚しても思案が、あるいは彼女をアイコンに立てれば、社会にも介入していくのではないだろうか……？

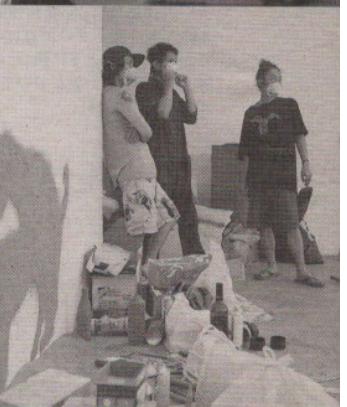
まずエリイ本人の同意を取りつけ、卯城はめほしい仲間に声をかけた。美学校一期生の岡田将孝

まず意識したのは、村上隆から会田誠に至るオタク的なアーティストの土壤だった。オタクと並ぶ日本文化としてのギャル、ギャルの象徴である渋谷渋谷といえば早朝のネズミ……。逆算のもと決まっていった初個展「スーパー☆ラット」の批評はおむね好意的だった。東京郊外見代美術館のチーフ

「ヒロシマの空をピカツ」
でさらされた非難と嫌悪

「まずアイデアの才覚が際立っていた岡田を押さえていたこと。バランス感覚のある編集者の林と、造形の稻岡、全力でいじられ役に徹する水野に、ミューズとしてのエリイがいる。卯城のプロデューサー的な嗅覚に感心したのを覚えています」親の影響を否定しつつ、卯城の幼い頃の夢の一つは「一揆の首謀者」だった。ニューヨークでの体験を共通認識に、エリイという絶対的な武器を手にして、卯城は決して外に向かないアート界に殴り込みをかけることを決めたのだ。

に、美大受験に失敗してきた同三期生の稻岡求。他校で会田の指導を受け、誰よりもズケズケと輪に飛び込んでくる水野俊紀。卯城は自分も入りたいという友人の希望をすべてはねのけた。楽しげ



キュレーター・長谷川祐子は、彼らの個性を「エリイ以外は正規の美術教育を受けていない」

点。自分たちの言葉で時代に反応している」と説明。会田も「渋谷のネズミも広島という現場も、生ものを表現に持つてくる。世代のせいかもしれないがその発想は僕ではない」と肉付けする。

だが、アート界の評価は次第に届いてくるものの、期待した「普通の人」の声は一向に聞こえてこない。むしろ「必死にぶざける」との「ぶざける」部分ばかりがフォーカスされ、作品を発表するたびに批判を受けた。

最大の非難にさらされたのは〈ピカツ……〉だった。期待していたのと正反対のベクトルから彼らは社会の注目を浴びたのだ。一般メディアを巻き込んでの大騒動に発展したこの作品は、だからこそ現時点での彼らの代表作でもある。

そもそも〈ピカツ……〉は、広島市現代美術館が主催した公募展に別作品で入賞し、出展を許されたものだった。審査員の一人が口にした「原爆ネタだけはやるな」という一言が逆にメンバーの心に刻まれていた。

平和という漫然としたテーマが漂う企画会議で、最初にアイデアを提示した林は当時の心境についてこう説明する。「たしかに原爆は僕らには他人事かもしれないけど、他人事である重要性は語つ

ていいと思った。村上さんや会田さんも原爆はやっているが、あれは上の世代の表現。俺ら世代の原爆、俺たちだからできる平和の表現は何かとばかり考えた」。

その林の「どうにか空をピカツと……」という一言から始まり、飛行機雲で、直接的に文字を描くという輪郭は少しずつできていった。ある程度の非難を受けることは予想したが、被爆者を傷つけるつもりは毛頭なく、目立つためのウケ狙いと取られるのは何よりも心外だった。だが結果は真逆。撮影の翌日に地元紙に取り上げられると、城の謝罪会見、そして展覧会そのものの中止へと彼らは一気に追い込まれていく。

「だけどエリイちゃんだけはそうした昔からの感覚を持ち続けていると思うんです。嫌いな言葉だけど『普通』の感覚を忘れてない。やっぱりあの連中は彼女に依るところが大きいんですよ」

決して御輿ではなく、ただのアイコンとしてでもない存在。傍からは誰よりも異端に見えるエリイにしかない「普通の感覚」とは何なのか。

今年27歳になるエリイはメンバー内で唯一正的なアート教育を受けていた。建設会社に勤める父と専業主婦の母のもと、小学校から高校までを田園調布雙葉学園で過ごし、3歳から習うピアノの教師の勧めで美大受験を決意。その後横浜の美術大学の視覚伝達デザイン学科に入学した。香港での例に限らず、エリイはチームの中心にいながら、いつも一人離れたところにいる。週のうち〈Chim↑Pom〉のために使うのはせいぜい

控えたいという中、ほぼ唯一正面から批判した者がいる。チーム結成前からメンバーの友人で、自身もアート界の一線で活躍する遠藤一郎は「個人的な意見。ヤツらはうるせえって言うだろうけど……」と前置きした上で、こう言った。

「僕はやっぱり〈ピカツ……〉は受け入れちゃいけないものだと思うんです。芸術は自分たちを振り向かせるための手段じゃない。傷つく人がいても仕方ないと開き直った瞬間、アートは社会に対する暴力にもなりえると思うんです」



チーム仲は良いが、発言権にはヒエラルキーも。「断トツの頂点にエリイちゃんがいて、ずっと下に僕。そのすぐ下に林、稻岡、岡田が並んでいて、断トツの底に水野」(卯城)

■ちん・ぱむ

- 2005年 〈Chim↑Pom〉結成。チーム名はエリイの思いつきによるもの。「変な名前と思ったけど反対はできなかつた」とあるメンバー。結成から1ヵ月後に福岡が加入。
- 06年 初個展〈スーパー☆ラット〉。無人島プロダクションのこけら落としでもあった。
- 1stDVD「P.T.A.」発売。
- 07年 広島市現代美術館主催の「Re-Act 新・公募展2007」に〈サンキューセレブプロジェクト アイムボカン〉出品。グランプリにあたる広島市現代美術館賞を受賞し、翌年の個展が決定。
- 個展〈オーマイゴッド〉開催。
- 2ndDVD「The Making of Thank You Celeb Project I'm BOKAN」発売。
- 08年 〈日本のアートは10年おくれている〉〈友情か友頃か友倒れか〉〈オーマイゴッド!~気分はマイアミビーチ~〉と立て続けに個展を開催。なお、〈日本のアートは……〉の副題は「世界のアートは7~8年おくれている」。
- 〈ピカッ……〉撮影、謝罪会見、個展の開催自粛。
- 09年 個展〈広島!〉〈捨てられたチンボ展〉〈にんげんていいな〉(FujiYAMA, GEISHA,JAPAnEse!)開催。
- 3rdDVD「JOY TO LOVE」発売。
- 広島の騒動の顛末と関係者の証言を集めた『なぜ広島の空をピカッとするはいけないのか』刊行。
- 10年 ソウルで開催されたAsia Art Awardで、ファイナリスト(日本代表)として作品展示。
- 初作品集『Chim↑Pom』刊行。
- 森美術館で〈六本木クロッシング2010展:芸術は可能か?〉開催中(7月4日まで)。
- 8月7日から無人島プロダクションで個展開催予定。

チーム仲は良いが、発言権にはヒエラルキーも。「断トツの頂点にエリイちゃんがいて、ずっと下に僕。そのすぐ下に林、稻岡、岡田が並んでいて、断トツの底に水野」(卯城)

チーム仲は良いが、発言権にはヒエラルキーも。「断トツの頂点にエリイちゃんがいて、ずっと下に僕。そのすぐ下に林、稻岡、岡田が並んでいて、断トツの底に水野」(卯城)

ボーカルもその一つだ。エリイと小林をつなげたのは放送作家の倉本美津留。アーツファンを公言する倉本は早い段階から〈Chim↑Pom〉に注目し、自身の番組にメンバーを出演させている。

ある収録の日、倉本は空いた時間にエリイをドライブに誘った。かねてからなんとか彼女を引き上げたいと思う一方で、懸念もあった。ちょうど渋谷に差し掛かった頃だった。

「もしもお前だけ売れてしまつたら、〈Chim↑Pom〉としておかしなことにはならないのか?」

それに対するエリイの答えは「大丈夫、私はみんなを信用している。それに、私がみんなを食べさせていかなきやいけないんだ」。

倉本の紹介を受けた小林は、試しにエリイに散文を書かせてみた。送られてきたメールに〈死ぬ

一全員にぶつけた質問がある。

——もし6人全員が「面白い」と信じられるアーティストがあつたとして、でもそれをするとこの国の法に触れる可能性がある。だけど、人は誰も傷つけない。あなたならどうする?

卯城は「全員が盛り上がりやると思う」と言い、稻岡は「ちゃんと理解されるものなら」。岡田と林は「やると思う」と簡潔に口にし、水野は「やつてしまいそつだから怖い」と答えた。エリイは一人「やらない。絶対やらない」と即答した。

最後に話を聞いたエリイにだけこの結果を伝えると、彼女は「だからあいつらダメなんだよ」と噴き出し、少し考えてからこう言った。

「だつて私たちはただ“芸術家”っていう職業な

「アートが一番イケてる」

そのエリイを含めた〈Chim↑Pom〉のメンバー

——もしく6人全員が「面白い」と信じられるアーティストがあつたとして、でもそれをするとこの国の法に触れる可能性がある。だけど、人は誰も傷つけない。あなたならどうする?

卯城は「全員が盛り上がりやると思う」と言い、稻岡は「ちゃんと理解されるものなら」。岡田と林は「やると思う」と簡潔に口にし、水野は「やつてしまいそつだから怖い」と答えた。エリイは一人「やらない。絶対やらない」と即答した。

最後に話を聞いたエリイにだけこの結果を伝えると、彼女は「だからあいつらダメなんだよ」と噴き出し、少し考えてからこう言った。

「だつて私たちはただ“芸術家”っていう職業な

れと一致する。違っている点があるとすれば、それを隠さずに出しまくること。あの短すぎるスケートに野心が見え隠れしていますよ」

エリイは仮にソロとしてどれだけ売れたとしても〈Chim↑Pom〉を離れない、最後の一人になつても自分だけはしがみつくと言つた。その理由を「だつてアートが一番イケてるし、そのアート

を社会について〈Chim↑Pom〉の考えは絶対にイケてると思うから」と説明した。

わずか数時間でまた颯爽とエリイがどこかへ消えたあと、香港の準備会場は活気に充ちたままだつた。撮影のとき、林がわざわざ着替えたTシャツには、こんな一文が書かれていた。

〈FUCK ART LET'S DANCE〉

アートという舞台の上で、彼らは外に向けて躍つている。いや、どう躍ればみんなが振り向いてくれるのか、必死にもがいでいる最中だ。

だけだから。べつに生き方じゃない。そこを誤解している限り、絶対に一般の人になんて振り向いてもらえない。アーティストだから貧乏でいいな

んていう甘えた考え方、私は絶対に許さない」

エリイは仮にソロとしてどれだけ売れたとしても〈Chim↑Pom〉を離れない、最後の一人になつても自分だけはしがみつくと言つた。その理由を「だつてアートが一番イケてるし、そのアート

を社会について〈Chim↑Pom〉の考えは絶対にイケてると思うから」と説明した。

わずか数時間でまた颯爽とエリイがどこかへ消えたあと、香港の準備会場は活気に充ちたままだつた。撮影のとき、林がわざわざ着替えたTシャツには、こんな一文が書かれていた。

〈FUCK ART LET'S DANCE〉

アートという舞台の上で、彼らは外に向けて躍つている。いや、どう躍ればみんなが振り向いてくれるのか、必死にもがいでいる最中だ。

(文中敬称略)

早見和真

1977年生まれ。大学在学中から「AERA」「Sportiva」「SPA!」などで執筆。2008年に「ひやくはち」で小説デビュー。
1. 同作は映画化もされた。